

デート DV 防止啓発講座

和光大学ジェンダーフォーラムは、町田市男女平等推進センターとの共催で「デート DV 防止啓発講座」を毎年開催している。今年度は、NPO 法人レジリエンスの柴田千春氏を講師としてお招きし、共通教養科目「法と人権」（徳永貴志教授担当）の受講生を中心に約 150 名が参加した（2019 年 11 月 14 日開催）。

DV は親密なカップルの間に存在する力の差から生じることが多い。暴力を振るう側は相手への支配を強めるために暴力を用いるということは、過去の講座でも幾度となく確認してきた。また、DV は親密な関係の内側で起こるため被害の訴えが他者に伝わりにくく、暴力が繰り返されエスカレートすることで、被害者は無力感に陥り、心身の傷はより深くなる。柴田氏も、このような DV の構造の複雑さとその解消の困難さを指摘されていた。暴力の恐怖は視野を狭め、「従っておいた方が安全だ」、「このままやっていくしかない」という心理状態（トラウマティック・ボンディング）に被害側を追い込んでいく。このようなトラウマは心に大きな傷を残し、暴力から逃れた後も容易に癒えるものではないようだ。こうした暴力は身体に対するものだけではない。例えば、デートの費用を一方が全額負担するよう他方に強いたり金品を貢がせたりしていればそれは経済的暴力であるし、パートナーの服装や一挙手一投足にいちいち注文をつけるのは精神的暴力である。



付き合っているならセックスは当たり前だという考え方や、セックスで相手との親密度を測るといった考えも暴力につながりやすい。パートナーに嫌われたくないためにセックスの求めに対してあいまいな返事をしたり、あるいは、はっきり断っても相手が「YES」だと一方的に解釈したりすることによって明確な同意のないセックスが行われれば、それは性暴力である。男女間の同意のないセックスは望まぬ妊娠につながり、妊娠をきっかけに激しい暴力が始まることもあるようだ。セックスの拒否が尊重されないのであれば対等な関係とは言えない。「NO」と言うことは決して相手の人格を否定するものではない、と柴田氏は強調されていた。

このように、DV は誰もが被害者にも加害者にもなりうる身近な問題であるが、暴力を振るわれる側には何の非もない。なにより恋愛の中に「暴力」を持ち込まないようにするにはどうしたらよいかを考えることが大切だ。恋愛は人の感情を大きく揺さぶるものである。「好きだ」という思いは、時には嫉妬という感情を生み、これが束縛という行為につながることもある。しかし、束縛と愛情とを混同してはならないと柴田氏は言う。愛情のある健全な関係とは相手を尊重し合うことであって、力で従わせることではない。パートナーを思い通りにしようとするのは、尊重するのとは真逆の行為である。人は一人ひとり違って当然であり、相手との違いを受けとめて互いに尊重しあうことによってはじめて親密な付き合いが可能となる。また、対等な関係を築き、その関係のなかに安心感と安全感があってこそ親

密な関係はより深まっていくだろう。

他方、DVの問題では傍観者にならないことが重要であるとの指摘もあった。もし、友人や知人からDVの相談を受けたら、暴力は間違った手段であることを伝え、暴力とは異なるコミュニケーションのあり方を一緒に考えるのも一つの方法である。また、どんなアドバイスをしてよいかわからなければ信頼できる別の友人に相談しても良い。ただし、アウティング（本人の同意なく第三者に本人の秘密を暴露すること）にならないよう本人を知る人には相談しないことも大切であるそうだ。もし、自分がDVの当事者になってしまったら、何をやってもそこから逃れられないような気持ちになるかもしれないが、勇気を出して信頼できる誰かに相談するところから始めよう、とのメッセージで本講座は締めくくられた。世界を見渡しても、力を持つ者が物事を暴力で解決しようとしていることの多さに驚く。しかし、暴力は何の解決ももたらさない。そのことを改めて確認した今年のデートDV講座であった。



(阿野理香・ジェンダーフォーラムスタッフ)